

「我が人生思い残すことなし」(後編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 雄大とはるかとは祖父母の居る神戸の父の実家で夏休みをすごしていた。そこでは祖父母の話から当時の父の姿や、先の戦争での出来事を感じ取っていた。そして今、その原点である「広島」を訪れ、様々な光景から自分の胸に何か強く確信的なものを覚えた。とその時、父の姿が彼の眼に映った。 =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

9. 渡米

あれから5年の時間が過ぎた。雄大は20歳になり、高校卒業後、大学2年で国際交流を学んでいた。そこで特に日米関係を専攻し、太平洋戦争からアメリカの戦後占領政策について研究中だった。そして、昨年9月から約6ヶ月の短期留学のため、ここワシントンD.C.に来てホームステイで過ごしている。今は丁度クリスマス休暇のため、日本へ一時帰国のため、成田への飛行機の中で新たなレポートを作成中だ。ここに来て分かった事は、まず彼らの年代では「日米戦争」について知ってるか、知っていても関心のある人はごく少数であるという事。

さらに関心があっても、日本国内において被害について知ってる人などほぼ皆無だという事だった。それらについてはおおよそ50代以上、つまり親の世代が体験者の人たちまで遡らなければならなかった。そして広島、長崎の原子爆弾投下については「正しい。」「やむを得ない。」と言った意見が大半を占め「誤りだった。」と言う人はほんの数%以下だった。その理由は、「さらなる被害を喰い止めた。」「戦争を早く終わらせる事ができた。」という様なもので、日本人である雄大とは、大きな歴史観の違いがあった。『彼らにどんな責任があったというのだ』『原子爆弾投下を予告し、戦争継続を断念させる事だってできたはずだ』『結局初めて作ったものを試して実験しただけだろう。』雄大は、言い様のない悲しみをこらえ切れなかった。その時彼の脳裏にあの日広島で見た外国人ボランティアガイドを思い出した。



『そうだ、彼らの様な人だっている。彼らの中にもきっとアメリカ人だっていたはずだ』『彼らは決して被爆者への哀れみとか同情心から行動しているのではない、すでに人類を何度も滅ぼせる程存在している核兵器の脅威を『HIBAKUSYA(”ヒバクシャ”は既に国際語)』から学び自分達の問題と捉え、突き動かされているのではないか!』『そういうメッセージならきっと多くの人々に受け止めてもらえるはずだ!』『そうだ、その事を自分はやって行けばいいんだ。』雄大は心に決めた。「Do you want to something drink? (お飲み物はいかがですか?)」キャビンアテンダントの声が聞こえた。「No, Thank you. I want to sleep. (眠りたいので、結構です。)」雄大は笑顔で返した。

